

病理診断実践演習

科目責任者 石田和之(病理診断学)

I. 前 文

病理診断実践演習では、担当した症例について、顕微鏡を用いた診断演習、プレゼンテーション、ディスカッションを繰り返します(ステップ1)。顕微鏡でみえる形態像から、疾患の成り立ち、診断、経過、治療について幅広く学ぶことができます。次に、病理解剖された症例を主治医と病理医の視点で、臨床病理相関を行いながらまとめます(ステップ2)。医学知識を総動員して、患者がどうして亡くなったのか、どうすれば助けられるのか、について考えます。病理学各論、病理学各論実習で学んだ様々な疾患を体系的に理解するとともに、医師になるモチベーションを高め、知識を実践する重要な機会となるはずです。

挑戦したい気持ちと自ら学ぶ姿勢を尊重します。道筋を示しながら、疾患の考え方を学べるよう指導します。顕微鏡の見方、病理所見のとり方、スライドの作り方は、担当教員が丁寧に指導しますので心配はいりません。

II. 受入可能人数

3年生から6年生までが対象です。本演習は顕微鏡を用いながら実践的に行うため、同じ時期に2～3名までとします。

III. 担当教員

科目責任者	石田和之	病理診断学	教授
担当教員	石田和之	病理診断学	教授
	金子有子	病理診断学	学内講師
	松田葉月	病理診断学	学内助教
	大和田温子	病理診断学	学内助教
	野田修平	病理診断学	学内助教
	野沢友美	病理診断学	学内助教

IV. 学習内容

1. ステップ1:

1～2週間に数疾患を基本として症例を担当し、土曜の午前にディスカッションを行います。

- ① 平日は、担当した症例について顕微鏡を用い、組織所見、病理診断、臨床病理相関についてまとめます。担当教員が適宜、みるポイント、まとめ方を指導しますが、病理医が常に行っているように、自ら教科書、文献を調べながら病理診断を実践する姿勢が必要です。
- ② 担当した疾患について、科目責任者ととも鏡検しながらディスカッションします。自らまとめた疾患の基礎から臨床まで、一連の流れで理解できるようディスカッションを進めます。患者にとってその病理診断がどのような意味を持つのかについても考えます。

2. ステップ2:

病理解剖が行われた症例を受講者数名のグループで1例担当します。2～3ヶ月かけて臨床経過、肉眼像、組織像、臨床病理相関についてスライドにまとめ、最後に講室内での発表会を行います。まとめ方、スライドの作成方法なども含め、担当教員が段階を踏みながら指導します。

3. その他:

- ① 診断演習、プレゼンテーション、ディスカッションのアクティブラーニングを教員と繰り返し行います。
- ② 4～6ヶ月を1クールとして上記の1, 2を行います。
- ③ 各自の進み具合、習得状況等をみながら、1の担当症例数、2の開始時期を随時調整します。
- ④ 希望し許可される状況であれば、病理解剖に入ることが可能です。

⑤ 日程は相談の上で決定しますが、教員の都合で日時や時間が変更となる場合があります。

V. 学修の到達目標

1. 病理診断に基づいて、担当した疾患の病態を説明することができる。
2. 病理学各論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、病理学各論実習の理解を深め、成績向上に繋がられる。
3. 自ら学ぶ姿勢を身につける。

VI. 成績評価の方法・基準

1. 演習・プレゼンテーション・ディスカッションによる実技試験（60%）、剖検検討会における発表会（30%）、出席の状況（10%）により判断します。
2. 真摯に病理診断を通じて患者に向きあう姿勢、自らを高める積極性を重視します。

VII. 教科書・参考図書・AV資料

1. 病理学の教科書があると復習に役立つでしょう。特定はしませんが、なるべく最新改訂版ないし最新著書が望ましいです（以下を参照のこと）。
ロビンス基礎病理学 原書10版（丸善出版）
標準病理学 第6版（医学書院）
病理組織の見方と鑑別診断 第7版（医歯薬出版株式会社）
2. 講義中に使用する教科書・参考図書・AV資料は講座で準備します。自身で文献を検索して資料を収集する場合は、講座のPCを使用することが可能です。

VIII. 質問への対応方法

質問は随時受け付けます。病理診断学医局は内線2187です（平日9時から17時）。

IX. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間 *（ ）内はそれに必要な時間の目安

実習の中で担当した症例の疾患について理解できるようにします。事前事後学習として、担当疾患について教科書を一読してください（各30分）。

X. コアカリ記号・番号

医学教育モデル・コア・カリキュラム（平成28年度改訂版）： A-1, A-2, F-2-4)

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

1. 担当した疾患について各自がまとめた組織所見、病理診断、臨床病理相関について、ディスカッションしながら理解を深めていく形でフィードバックします。
2. 理解度が低いと思われる内容については、必要に応じて学生に周知し、症例の選択や実践演習の修正を行います。

IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能，種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い，他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療，予防について原理や特徴を含めて理解し，他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け，正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	○
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け，患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	○
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け，患者やその家族，あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	○
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	◎
	書籍や種々の資料，情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し，自らの学修に活用することができる。	◎
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち，専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち，実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し，自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け，自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	○
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	○